



当院における図書室運営の経緯と業務について

村上 敦子

I. はじめに

2018年3月に開催された近畿病院図書協議会第142回研修会（事例報告研究会）において「当院における図書室運営の経緯と業務について」というテーマで発表をさせていただく機会がありましたが、このたび発表と同じテーマで、この誌面をお借りし、改めて述べさせていただくことになりました。拙筆ではありますが、貴重な機会を与えられたことに感謝しつつ、筆を進めたいと思います。

II. 神戸市立医療センター西市民病院について

まずは、神戸市立医療センター西市民病院（以下、当院）とその成り立ちについて紹介します。

当院は神戸市長田区に所在し、年間を通じた24時間体制での救急医療および高水準の標準的医療を提供すべく、市街地西部の中核病院として機能しています。

1924年に長田区に開院した市立神戸診療所がその前身で、幾度か名称を変更し、1995年の阪神・淡路大震災被災、2000年の全院再開を経て、2007年に現在の神戸市立医療センター西市民病院、2009年に地方行政独立法人神戸市民病院機構の一機関病院となり、現在に至ります。

病院の歴史を振り返ってみて、最も特筆すべき出来事としては、1995年1月17日早朝に発生した阪神・淡路大震災における被災であると言えます。



図1 被災時の病院写真

震災により本館の5階部分は圧壊（図1）。

崩れた5階西病棟には44名の入院患者と3名の看護師、合計47名が取り残されました。被災直後から職員とボランティアによる救助活動が始まり、午後からはレスキュー隊も到着して、46名を当日中に無事救出しました。残り1名の患者は、早朝詰所で採血を終えて自室に帰る途中に被災、廊下で落下物により圧死し、残念ながら遺体で収容されましたが、他の患者は早朝で就寝中であったため、ベッドの柵が落下物を支えて無事であったとのこと。死者を最小限に食い止めることができたのは不幸中の幸いです。この被災により、病院は当面の間、その機能を失うこととなりました。被災後、長田区庁舎の仮診療所で診療を始め、1995年11月に北館、1999年10月には本館で診療を一部開始。全館再開に漕ぎつけたのは2000年。被災から約5年の歳月を要することになりました。

III. 図書室の再開～担当者として着任

震災当時、北館の事務局そばにあった図書室も被災。蔵書の大半が水を浴び、ガラスが飛散

するなど、利用に耐えない状態であったため、ほかの部署同様、図書室も閉鎖していましたが、病院の全館再開に併せ、再開が決定されました。

新しく図書室を開設するにあたり、北館事務局そばから、主な利用者である医師や看護師の詰所に近い本館 4F に場所も移動することになりました。

私は 1999 年の秋に新しい図書室に着任しましたが、旧図書室で勤務していた前任者は図書室が閉鎖していたため、すでに退職しており、引き継ぎがないまま業務を始めることになりました。今となってみれば、ただ資格を持っているというだけで、司書としての勤務経験もない私がよくも図書室を立ち上げたものだと思いますが、新しく図書室を作るという経験は、良くも悪くもなかなか与えられないチャンスです。私の場合は、あの当時、わからないという恐怖よりも、むしろ新しく作り上げる楽しさの方が勝っていたように思います。

着任から再開まで、分類法の決定、図書管理システムの導入、備品の選定、資料の選定・購入・受入・管理ソフトへの入力・装備・配架の方法……。考えなければならぬ業務がたくさんありましたが、再開にあたり、資格取得時に実習でお世話になった図書館の方、神戸市看護大学附属図書館の方に運営の方法を相談したり、神戸市立中央市民病院の図書室を見学させていただいたり、近畿病院図書室協議会の会員の方達——その当時は「近図雲」(近畿病院図書室協議会の会員サイト)のような便利なツールもなかったため——電話で個別に相談に乗っていただくこともありました。周りの方々の助言や協力があって、無事図書室を立ち上げることができたのを思い出し、改めて感謝の気持ちをここに記したいと思います。

IV. 新図書室について

新しくできた図書室は、北側の窓から六甲山の美しい山並みが見える気持ちの良い部屋です。部屋面積は大変狭く、座席数もわずかですが、



図2 室内写真1



図3 室内写真2

インターネットが利用できるパソコンやコピー機、スキャナーなど、最低限必要なものは備え付けてあり、勉強会の資料作りや研究論文の作成など、看護師や若い医師達によく利用してもらっています。新設後、暗号キー方式に入室方法が変わったことで、24時間、好きな時間に職員が利用できるようになりました(図2、3)。

再開当初は、新しく購入した図書と被災を免れた旧図書室の資料を合わせても、電動書架の棚が随分余るほど少なかった蔵書が、開室後18年を経て、室内蔵書は図書数約7,400冊、製本雑誌約12,000冊、着実に増えており、今では除籍を考えなければならないほどです。

V. 図書管理ソフトの導入について

図書室担当者としてはありがたいことに、当院では再開時から図書管理ソフトによる資料管

理を行っています。開室時は NEC の公共図書館向け管理ソフト「LiCS-R」を導入していましたが、ソフトのバージョンアップ費用が高額であったため、2009 年に小規模図書室向けの蔵書管理ソフトである株式会社ナレッジワイヤの「司書アシスト」（現株式会社エルエスアシストが管理）に切り替え、現在に至っています。

「司書アシスト」は、蔵書管理・資料検索・貸出返却業務・統計業務・相互貸借業務など主な図書館業務に対応したとても便利なソフトです。年間サポート契約をしていれば、専用ホームページも開設できます。

「LiCS-R」利用時は、室内でしか蔵書検索できなかったのですが、司書アシストが提供する専用ホームページを開設し、パスワードと ID さえ知っていれば、院内外のどこからでもアクセスができるようになり、利用者にとってはより便利になりました。

ホームページでは蔵書検索だけでなく、各種のお知らせやお役立ちリンク、文献取り寄せの申込など、図書室と利用者を結ぶ活動の場としても活用できます。

VI. 図書室での各業務について

受入資料は「司書アシスト」に入力、装備を加えた後、分類番号順に配架しています。

資料分類は蔵書数が少ないことも鑑み、米国国立医学図書館分類法（NLMC）ではなく、日本十進分類法（NDC）の 5 桁を採用しています。

資料の貸出・返却は 24 時間随時行っています。貸出冊数は制限なし、期限は 2 週間。図書貸出簿に必要事項を記入後持ち出してもらい、読み終わった図書は入口側の「図書返却箱」に返却してもらっています。貸出期限を超えた図書に関しては月に一回、督促状を配布しています。

行方不明図書の対応はどここの図書館でも頭を悩ませている問題だと思いますが、当院も例外ではなく、完全な解決策が見いだせていません。新しく受け入れたり、人気のある資料には「無断持ち出し禁止」のラベルを貼るなど、できる

だけ利用者の注意を喚起するよう、努力しています。

蔵書点検は看護図書が 4・8・12 月の年 3 回、看護以外の図書は 8 月に年 1 回行っています。行方不明の図書は、点検後各部署に通知、ホームページ上にも掲載しています。

広報活動としては、利用促進のための新任者向けオリエンテーションを毎年春に行っています。2018 年の春から新任医師向けのオリエンテーションと併せ、UpToDate の利用講習会を試験的に行いました。広報効果は早速あったものとみえ、UpToDate のモバイル登録者も増加しました。今後も引き続き業者と提携し、さらなる普及と利用度のアップに努めていきたいと思っています。その他の広報活動として、月ごとの新着案内やお知らせが必要な場合は随時、ホームページ上と紙面にて各部署に通知しています。

図書委員会は、毎年秋に 1 回開催するのみですが、翌年の購読雑誌の選定や行方不明図書・廃棄図書の報告、その他運営について委員と議論し、決定しています。図書室は一人部署のため、他部署の職員の意見を取り入れるための貴重な機会であるとも言えます。

文献相互複写業務は着任当時、引き継ぎがなかったため、手続きの方法がわからず、試行錯誤のあった業務でした。申込先の担当者に教えていただいたりしましたが、後日近畿病院図書室協議会の新任者向け研修会を受けることで、正しい手続きやマナーについて学ぶことができました。こういった研修会があるのは、事情があって引き継ぎ無しに業務を始めた図書室担当者にとっては、とてもありがたいことです。

VII. 文献検索と臨床支援ツールについて

文献検索データベースは、開室から 2002 年度までは日本科学技術情報センター（現在の「科学技術振興機構」）の「JOIS」を契約していましたが、2003 年度から「医学中央雑誌 WEB 版」を契約し、今に至ります。

診療情報支援ツールはコクラン・ライブラリーを2010年度から2013年度まで、UpToDateを2004年度から現在まで契約継続しています。コクランとUpToDateの両方を契約していた時期もありましたが、UpToDateのサイト契約への強制移行と価格上昇に伴い、両者とも契約することが難しくなり、現在は利用者の多いUpToDate一本に契約を絞っています。

VIII. 今後の運営課題について

当院における今後の運営課題として、次の3点が挙げられます。

第一に資料の廃棄基準の作成についてです。図書については既に廃棄基準を定めているものの、雑誌については書架に余裕があったこともあり、まだ基準が定まっていません。

学術雑誌のオープンアクセス化が進み、ウェブ上で閲覧できる資料も増えました。この種の資料を優先的に廃棄し、スペースを確保する必要もありますが、加えて紙媒体の雑誌の保存年数の決定など、図書委員会での議論が必要です。

次に海外雑誌の価格高騰への対策です。予算枠に限りがあるため、臨床研修医必読の雑誌でない限りはできるだけ国内雑誌に希望雑誌を切り替えてもらっているのが現状です。海外文献は必要な部分のみ病院側の費用でコピーを入手したり、ペーパービュー契約をするなど、利用者の希望も汲みつつ、妥協点を模索していきたいところです。

限られた予算内で必要な資料を効率的に活用するために、神戸市民病院機構の所属機関内でのさらなる連携強化の必要性も感じています。

昨今コンソームシーム契約が盛んになりつつあります。所属機関の多い団体では、各自の負担も減るだけでなく、利用者の利便性も確保できて魅力的ですが、神戸市民病院機構のように所属機関が少ない場合は、メリットを享受できない苦しさがあります。コンソーム契約ができないとなれば、現行体制で資料を共有するシステム作り、例えば、機構内で所蔵の横断検索ができ、無料で複写を提供できるシステムの構築を期待したいところです。

IX. さいごに

検索機能のオンライン化や資料の電子化・オープンアクセス化など、図書館を取り巻く環境はこの20年で大きく変化し、図書館そのものの存在意義も問われるようになってきましたが、媒体が変わっても、人が何らかの情報を必要とすることに変わりはありません。

必要な情報を求めている人にいかに的確に効率よく提供できるかを考えていくのが、今後も図書館員に求められている使命ではないでしょうか。

この点を見据えつつ、業務改善に取り組みたいと思っています。

参考文献

- 1) 神戸市立病院紀要編集委員会編. 神戸市立病院紀要阪神・淡路大震災特別号. 兵庫：神戸市衛生局；1996.
- 2) 神戸市民病院機構神戸市立医療センター西市民病院地域医療在宅支援室編. 2017病院機能案内. 兵庫：神戸市民病院機構神戸市立医療センター西市民病院；2017.